



皆様こんにちは。

「つばめ通信（蓮田病院版）」の第3回目です。「摂食嚥下障害」という難しい言葉を使っていますが、要は「食べる事に問題がある」とはどういうことなのか、と正面切って聞かれると意外に答えがすぐ出てこないものです。私もこのプロジェクトにかかわるまでは実はあまり深く考えたことがありませんでした。もちろん、食べる意欲の問題、食べ方の問題、持っている病気の問題など、具体的に説明できるものもあるでしょうが、実は私たちが相談される「摂食嚥下障害」とは大半が加齢による、食べ物・飲物を含めた口の中のものをお腹に送り込む力の低下、ということなのだ、ということをおぼろげに実感しています。

喉の奥を観察する検査に「嚥下内視鏡検査」というものがあり、これはカメラのついた細い管を鼻から喉の奥に送り込み、普段の喉の奥の状態や、食べ物・飲物が喉に落ちてきたときにどういう動きが起こるかモニターに映して観察するものです。そうすると、一見何気ないよう

でも実は喉の奥には食べ物や粘液がたくさんこびりついていて、今にも誤嚥が起こりそうな恐ろしい状態の方や、食べ物が喉に入ってきて、普通は起こる「嚥下反射」、つまりゴックンという自然な動きが全く起こらない方、自分で一生懸命ゴックンをしているのに、力不足でうまく食べ



物が食道に送り込めていない方など、へえ、こんな風になっているのかと驚くことがよくあります。こうして実際に喉の奥を覗いてみることで「摂食嚥下障害」の問題点をあぶりだし、それぞれの問題点に応じた解決法を考える事で、中には安全に飲食ができるようになる方もいらっしゃいます。ムセがひどくて肺炎を繰り返している方が「歳をとったから食べられなくても仕方ない」と諦める前に、1度検査を受けてみてみてもいいのでは、と思う次第です。

今回は嚥下内視鏡検査の実際についてわかりやすく御説明しますのでお楽しみに。

私たち 歯科の取り組み

口腔の健康は身体的だけでなく、精神的、社会的にも大きな影響を及ぼします。清潔な口腔内は疾病予防、免疫力の向上につながり、また口腔機能の保持増進は患者様のQOL（生活の質、生命の質）を高めます。口腔と口腔周囲は、呼吸・栄養・会話などの機能をつかさどり、人間が生まれ一生を終えるその瞬間まで、身体的、社会的生活を維持しています。この口腔の健康を高める為に、大切になるのが口腔ケアです。

口腔ケアは従来、口腔清掃、虫歯や歯周病などの感染予防という観点から示されてきましたが、近年では、口腔内細菌が誤嚥性肺炎、人工呼吸器関連肺炎、心血管疾患、糖尿病などに関連することが明らかとなり、口腔ケアの意義は広範囲に及んでいます。

口腔ケアはその内容から、口腔清掃を中心とする器質的口腔ケアと口腔機能訓練（舌、口腔周囲筋のトレーニング、嚥下トレーニングなど）を中心とする機能的口腔ケアに大別されます。しかしながら実際、



歯科医師 山崎 崇史



歯科衛生士 尾崎 尚子

加齢による身体的な機能低下は摂食・嚥下機能の低下を伴い、器質的口腔ケアに加え、機能的口腔ケアが必要となることが多々あります。

特に今年の4月の介護保険改定では、口腔はリハビリ、栄養と合わせた三位一体による連携が重視されており、歯科が果たすべき重要な役割が示唆されています。

蓮田病院歯科口腔外科では総勢7名の歯科衛生士、同様に7名の歯科医師が在籍しております。医師、薬剤師、看護師、栄養士、言語聴覚士、作業療法士をはじめとしたスタッフが一丸となり専門的ケアを実施し、より多くの患者様のQOLが向上するように、日々活動させて頂いております。

宜しくお願い致します。